

## 北の総門

北の総門（北正門）は、この非常に堅固な城へ入ることができるたった3つ入口のうちの1つだった。萩城の最外郭である三の丸につながっていたため、中の総門、平安古の総門と同様に、この門は非常に厳重に監視されていた。昼間は警備員が門のすべての通行人を監視していた。夜間は門に鍵がかけられ、特別な許可を得た者のみが入城できるようになっていた。

三の丸には、毛利家の家臣たちが住んでいた。堀と城壁に守られていたが、城の外壁を破って侵入してくる者の足止めをするための街並みであった。しかし、この城郭が突破されることはなく、徳川幕府（1603～1867）滅亡後の1871年にこれらの城門は解体された。これにより、明治政府（1868～1912）は、かつては禁止されていた城郭への一般市民の立ち入りを自由にした。城門だけに限らないその後の城の解体は、武士による支配が終わり、西洋の思想や技術が受け入れられるようになった明治時代に生まれた考え方を反映している。

現在建っている門は長州藩開藩400年記念事業の一環として2004年に建てられたレプリカである。歴史的な記録をもとに作られた「脇戸付き高麗門」と呼ばれるもので、扉の内側には切妻屋根があり、扉を開けたときには扉が収まるようになっている。門の両支柱の間隔は5.9メートル、高さは7メートルで、日本でも最大級の規模を誇る。柱や梁には希少で高価なケヤキ材が使われており、その費用は約1億円（95万ドル）にも上る。